瓦谷山

瓦谷山だより

発行日　2020年6月15日
発行人　（宗）真光寺
　　岡本和幸
印　刷　現代社
編　集　（宗）真光寺

問い合わせ先
（宗）真光寺
TEL 0438-75-7414

○お寺HP
http://www.shinko-ji.jp/
○上総自然学校HP
http://www.shinko-ji.jp/satoyama/
○お寺ブログ【瓦谷山たより】
http://shinkoji.cocolog-nifty.com/ne ws/

vol.44

ごあいさつ

コロナウイルス問題で右往左往している間に、暦は春から初夏、夏へと着実に進んでいます。昨秋の台風被害、そしてこのたびの新型肺炎という試練を乗り越え、ようやく完成した薬師堂に、これまで仏殿にお祀りしていた薬師如来様を遷座いたしました。書院にお祀りしていたご本尊のお釈迦様は仏殿に遷座、それぞれに皆様よりご奉納いただいた四天王、十二神将様を配しております。また新しい仏具にも、これまでご志納いただいた方々の御芳名を記しておりますので、お参りの際にご確認いただければと思います。

今回の普請に際しましては皆様より多大な御寄進をいただきました一方で、できるところは自作もしております。坐禅堂の仏壇は、当山の役僧大御師が卓越した技術を駆使し、精魂こめて製作してくださり、仏殿の仏壇は四谷東長寺の旧本堂を荘厳していた木彫などを組み合わせ、私が製作しました。東長寺旧本堂が解体されたのは昭和六十三年ですので、彫刻は三十三年ぶりの復活ということになります。書院の中央の間に張り回した五色幕もそのときに四谷から袖ケ浦に来たものですが、正絹の立派な幕もさすがに色あせてボロボロになってしまったので、入山当時は何もなかった真光寺の荘厳に大いに寄与してくれたことに心より感謝し、眠りについてもらうことにいたしました。

書院中央のご本尊がお祀りされていたところには、屋根付きのお厨子が入りました。このお厨子はネットオークションに出品されていたもので、大阪南河内のお寺に大正五年からお祀りされていた旨の墨書があることから、やはり建替えか何かで役目を終えて人手に渡り、あげくの果てにオークションに出品されたのではないかと思われます。届いた当初はあまりにボロボロだったので少し後悔しましたが、気を取り直して磨き上げてみたところ、驚いたことに見違えるような立派なお厨子として再生を果たし、空間的にもぴったり収まりました。

禅宗の建築において書院は方丈ともいい、本来は住職の起居する建物を指すので、そこにお祀りする仏様は、皆様のお宅でいえば御仏壇のご本尊様に相当します。このお厨子には、真光寺に昔から伝わる薬師如来様を奉祀いたしました。ウイルスの脅威にさらされている今、一山を守護する方丈のお内仏にお薬師様をお迎えするのは、たまたまではありますが時宜にかなっているように思います。

阿弥陀信仰が隆盛をきわめる以前、最も人気があったのは薬師如来信仰でした。薬師信仰は山岳修験の人々によって全国に広められたといわれますが、紀伊半島とのつながりが深かった房総半島も修験道が盛んな場所だったからでしょうか、君津市や富津市では各寺に祀られた薬師如来を年ごとに御開帳したり、人が亡くなると百か日に地域のお寺のお薬師様を巡拝する「薬師参り」という風習が残っています。当山に伝えられたお薬師様も、かつてはそのような信仰の対象として地域の人々に尊ばれてきたのではないかと思います。

この数十年間の科学や医学の進歩により、私たちは疫病の恐怖から解放されたかのように振る舞ってきましたが、新型ウイルスの猛威を前にして、行き来を断ちそれぞれの家にこもるしか防御の術がないことを身をもって知りました。そんなこの数か月の世界を鑑みるに、疫病という眼に見えない災厄に恐れおののき、藁にもすがる思いでお薬師様のお力に頼った昔の人々の心情も、何となく理解できるような気がいたします。

幸いに私たちは疫病流行の仕組みも、病気の進行状況も、防除の方法も知っていますので、罹患しないよう十分に気をつけ、相互に協力して乗り切っていきたいものと思います。武漢での流行爆発からすでに半年が過ぎましたが、まだまだ先行きは不透明です。心が弱くなったり、疲れてきたらお薬師様を心に念ずることをお勧めいたします。

まもなく盆の季節となります。状況次第ではありますが、落ち着きましたらぜひお参り下さい。

合掌

真光寺住職　岡本和幸

行事報告

例年、六月の瓦谷山だよりは春のお彼岸法要や四月の植樹祭などの行事報告を掲載しておりましたが、コロナウイルス感染症拡大に伴い、大事をとって二月末からのお寺の行事は全て中止としました。お彼岸供養や七日法要（月例供養）は参加者不参にて僧侶のみで修行いたしましたので、本欄では行事報告にかえて、ここ三ヶ月の真光寺の動向についてご報告いたします。

恒期法要は僧侶のみで回向

◎薬師様の引っ越し

春の彼岸明けの日、今まで仏殿にてご本尊様として安置していた薬師如来様は建設中の薬師堂へ遷座（せんざ）されました。真光寺の薬師様は平成二十年、現在の伽藍完成にあわせ、滋賀の成安造形大学教授の伊藤憲太郎先生に制作いただいたものです。材質は銅で、高さは光背含め約二メートル、かなりの重量級で、ジャッキと男六人がかりでようやく遷座できました。

オーダーメードの輿（こし）で丁重に移動

◎仏殿の須弥壇づくり

仏殿は薬師様が遷座され、今まで書院に安置していたお釈迦様を迎えるにあたり、住職が須弥壇づくりに励みました。設計図も無しに薬師堂の余った材木でぶっつけ大工。半円の彫物などは四谷の東長寺旧本堂で使われていたもので、この彫物を生かし、作製中は紙芝居の舞台？とも言われながらも立派な須弥壇が完成しました。

現場合わせでゼロから作製

作製5日目まだイメージがわきません・・・不安。

東長寺からの彫物には鳳凰と獅子が彫られています

作製期間約1ヶ月、住職自信作の須弥壇が完成しました。

◎書院　薬師如来坐像安置

当山の薬師如来坐像は、江戸時代末期、二百五十年～三百年前の仏像で、金箔の剥離など傷みが激しく平成二十一年に皆様からのご寄進により修復した仏様です。いままでは秘仏のように書院お釈迦様の上段に安置しておりましたが、これからはお顔を拝してお参りいただけます。

また、こちらの厨子は大正五年より大阪のお寺で使われていた物で、今回ご縁があり、当山の薬師如来坐像の厨子としてお迎えしました。経年の傷みもありましたが、住職が磨き上げピカピカに蘇りました。

◎坐禅堂の須弥壇づくり

薬師堂一階、坐禅堂に安置する文殊菩薩様の須弥壇を作製しました。須弥壇としてだけではなく、後ろからは収納棚としても活用できるように引き違い戸も付けて造りました。坐禅会がたのしみになります。こちらは大御師が作製。

◎雛壇づくり

薬師堂の須弥壇上に安置された薬師様を四天王と十二神将が囲い込むよう、また下段から全ての仏像のお顔が見えるよう、須弥壇上に雛壇を作りました。五月現在まだ作製中のため仏像をしつらえた写真はお載せできませんでしたが、まもなく完成予定です。

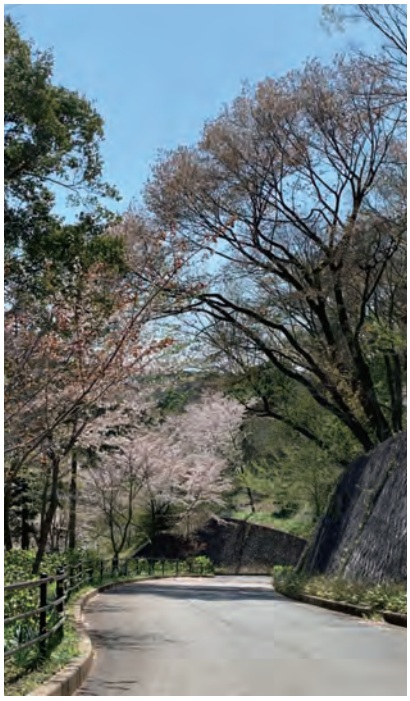
二、三段目の前板は雲形に細工

真光寺の春

お参りに来山できなかった方、
お花見を楽しみにしていた方へ
春の様子をお届けいたします。

【三月二十一日　開花】
今年は暖冬によりお彼岸の前にはすでに開花がはじまりました。
その後に寒の戻りがあり、開花のスピードはゆっくりとなりました。
お彼岸中日の翌日二十四日、オリンピックの開催延期が発表されました。

【四月二日　満開】
この日は快晴。南風強く、樹木葬墓苑に枝葉がこすれる音が騒めき、桜吹雪が舞った一日となりました。所々にサザンカの花弁が落ちていて、まだ茶色が目立つ芝生に彩を添えていました。世間では志村けんさんの訃報もあって、緊張感が高まる中、四月七日に緊急事態宣言が発令されました。



【四月十九日　新緑】
いよいよ芽吹きの季節となりました。この日、二十一度まで気温があがり、爽やかな陽気に。一方で江の島などの屋外に人が集まってしまったことが問題になりました。
真光寺では時折のお墓参り以外は人の姿はありませんでした。草刈りの機械音が響き渡る、いつもの風景です。

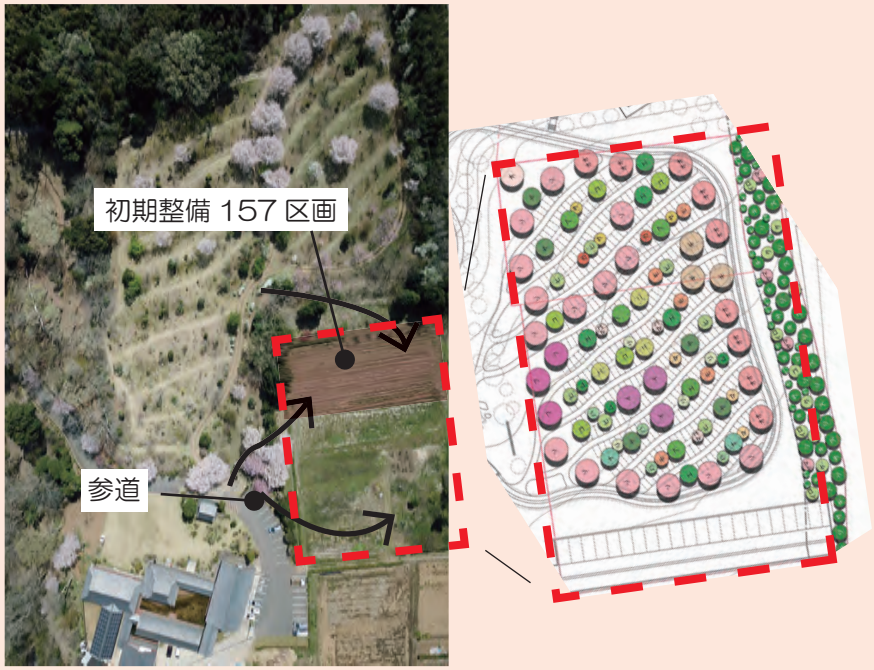
※写真、動画をホームページに多数掲載しています。

第四期「森の苑」を整備中です。

場所は境内の西側です。「農業振興地域」でありかつ、「埋蔵文化財」があることがわかっていて、土地利用は難しい状況だったのですが、時間をかけた協議の末にようやく墓地としての転用が認められました。

いつも通りのＤＩＹ精神で可能な限り真光寺職員で整備します。農地転用と文化財調査の都合上、まず初めに南側の約３分の１を開園します。区画数は初期１５７区画、全部で５００区画になる予定です。６月中旬ごろにはご案内できるように進めています。

（瓦谷山だより３８号でご紹介した第四期墓地は開園を保留いたしました。）



上総自然学校（里山再生活動）

里山の桜模様

新型コロナウイルスの影響で、初めての試みだった里山のお花見トレッキングイベントを急遽中止いたしました。イベントの開催日に合わせるかのように見事な花を咲かせた里山の桜。皆さんにご覧いただけなかったことが残念でなりません。一日も早くこの事態が終息し、また皆さんに里山の桜を愛でていただける日が来ることを心より願っております。

静かにひっそりと満開を迎える里山の桜

桜が咲くと田を耕す時期の目安。

田んぼを見下ろす桜

田植えが始まりました

今年も無事田植えをすることが出来ました。不安な状況が続く中で、いつもの作業をいつも通りに行えたことに安堵しています。コシヒカリはほぼ田植え終了しました。色米やもち米もあとひと頑張りです。

谷に響く田植え機の音。結構な速さで植えていきます。

成長が楽しみですが雑草との戦いも始まります。

今年も真光寺産、里山のお米 予約受付開始です！

昨年は天候の影響で不作だった里山のお米。販売開始後すぐに完売となり、いつもお買い求めいただいている皆様にはご注文をお断りする事態となってしまいました。今年の豊作を祈りながら予約販売の受付を開始させていただきます。白米、玄米、色米など、農薬を使わず自然からの恵みだけで丁寧に育てた真光寺のお米をぜひご賞味ください！

白米：2kg/¥1,100・5kg/¥2,500・10kg/¥5,000
玄米：2kg/¥1,000・5kg/¥2,250・10kg/¥4,500
色米（各種）：150g/¥300　　色々米：300g/¥600

ご注文は別紙の注文書をＦＡＸでお送りいただくか、お電話にてお申し込みください。

・ＴＥＬ：０４３８－７５－７４１４
・ＦＡＸ：０４３８－７５－７６３０

袖ケ浦の歴史

【連載】未来に伝えたいふるさとの歴史

望陀布の世界（二）

袖ケ浦市郷土博物館顧問　井口　崇

――古代の日本を支えた人びとは、「調庸の民」とよばれていましたが、彼らは租・庸・調のほかにも、雑徭（労役）、仕丁（中央官庁での労役）・衛士（都を警護する兵士）・防人（北九州沿岸を警備する兵士）など、実に多様な人頭税を納めなければなりませんでした。ここで取りあげている望陀布は調として都に納められていました。調は主として、諸国で産出される絹・絁・糸・棉・布で納められましたが、調雑物と呼ばれた鉄・塩・魚介・海藻などでの代納も認められていました。それらは都に送られ国家の財源となりました。

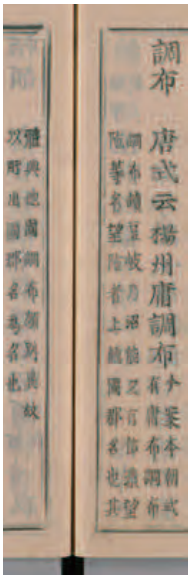
望陀布は、古代上総国の郡名であった「望陀」という地名を冠した特別な調の布でした。奈良時代に望陀郡となった袖ケ浦・木更津周辺の地域は、それよりも古い時代には「馬来田」と呼ばれていた地域であり、『万葉集』では万葉仮名で「宇麻具多」と表記されていました。今回は、望陀布にせまるために、その馬来田と望陀という地名について考えていきます。――

◆『和名類聚抄』―わみょうるいじゅうしょう―

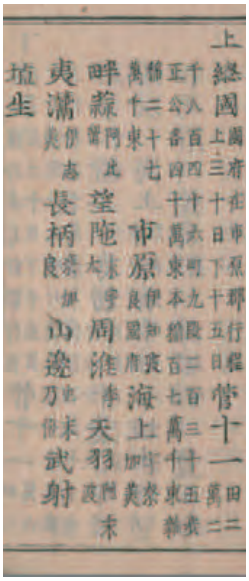
『和名類聚抄』は、平安時代中頃（一〇世紀前半）につくられた全二十巻からなる漢和辞典で、漢語の名詞を分類配列している百科事典のようなものです。その巻五の国郡部（写真②）の上総国の項には市原・海上・畔蒜・望陀・周淮・天羽・夷灊・長柄・山邊・武射・埴生の十一郡が記されています。写真で示したのは、国立国会図書館のデジタルコレクションとして公開されている、元和三（一六一七）年頃に刊行されたとする古活字版です。そこには、郡名（武射・埴生には記入無し）の下に万葉仮名でその読みが示されています。望陀郡については、望陁―末宇太―とあります。

また、前回紹介した「調布　讀豆岐乃沼能　有信濃望陁等名望陁者上総国郡名也其體與他国調頗別異　故以所出國郡名為名也」（調布　みつきのぬの　信濃　望陀等の名が有る　望陀は上総国の郡名なり　その形は他国の調と著しく異なっている　故に出す所の国郡名をもって名としている）というのも、この和名類聚抄の巻十二の布帛部にあります。（写真①）

写真①



写真②



国立国会図書館デジタルコレクション『和名類聚抄』
巻１２布帛部（右）　同巻５国郡部（左）

◆望陀という地名と郡の中心部

望陀郡は、小櫃川の中・下流域にあり、畔治、表可、倉戸、飯富、磐田、河曲、鹿津の七つの郷からなっていました。現在の木更津市中郷地区の上望陀・下望陀がその遺称地で、郡衙あるいは郡家とよばれる郡の役所があった場所であろうと推定されていますが、その実態はわかっていません。

私は、上望陀・下望陀地区に隣接する袖ケ浦市の三黒・谷中地区にも郡衙の範囲が及んでいた可能性が高いと考えています。それは、三黒という地名が御厨とか御蔵の転訛によって生まれた地名ではないかと思われること。また谷中という地名に関しては、室町時代の土地台帳に「まやなか」と記されているものがあります。それはおそらく、古くは郡衙に併設された厩があって「うまやなか＝厩中」という地名がつけられたのだけれども、「う」は初めから発音しなかったか、しなくなったかで、室町時代には「まやなか」となっていた。さらに時代を経て「ま」も発音しなくなり、ついには「う」「ま」の両音を端折ってしまった結果として「やなか」地名になった。だから、平坦な水田地帯であるにもかかわらず「谷中」という漢字を当て、現在の地名となっているのではないかと考えているのです。

また、これまで述べた郡衙推定地周辺からは少し離れますが、袖ケ浦市の百目木に望陀という小字が残されていることも忘れてはならないでしょう。

◆漢字二文字表記の起源

『続日本紀』という歴史書の記録をたどってみると、奈良に都を移して間もない頃、時の元明天皇の和銅六年（七一三年）五月に、畿内七道諸国の郡・郷の名称は、好い字で表記するようにという勅令［好字令］が出されています。それ以前は、一文字表記もあれば二文字、三文字、四文字表記などもあり様々でしたが、その頃から山・川や国・郡・郷の名称や地名なども二文字化が進んでいくようです。この段階では二文字にしなさいということは書かれていません。しかし、平安時代中期（一〇世紀の前半頃）に編纂された『延喜式』という法令集には「凡諸国部内郡里等名並用二字必取嘉名」（諸国の郡や里の名は必ず二字の良い字にせよ）とありますから、奈良時代から始まっていた地名等の二文字化は、約二〇〇年後に法律で義務付けられたと言えるでしょう。

◆宇麻具多・馬来田・望陀

それでは望陀となる前の地名はどうであったかというと、「馬来田」がありました。古墳時代には馬来田国造が治める地域で、その後、大化の改新（六四五年）以降には馬来田評とよばれた時期があり、そこからは御調としての「馬来田布」が献上されていたことがわかっています。「望陀布」は「馬来田布」からの変化であったことがわかります。

ＪＲ久留里線の駅名や付近の小中学校名として知られる馬来田ですが、馬来田駅周辺には馬来田という地名はありません。地名としての馬来田が残っているのは、袖ケ浦市飯富の小字地名「馬来田」だけなのですが、そのことはあまり知られていないので残念です。私は、この馬来田を「まぐた」とふり仮名をつけるようにしています。「うまくた」なのか「うまぐた」なのか、あるいは「まくた」なのか「まぐた」なのかも含めて、その読みや発音の原型はわかっていないことなのですが、袖ケ浦市飯富の「馬来田」地名を、地元の古老に発音してもらうと「ｍａｇｕｔａ」と発音されたのです。そのように昔からよんできたのだと教えてくれました。その時から私は、古代の読みや発音が口伝によって今に残されているのだろうと考えるようになりましたので、「まぐた」とルビをふっています。

また、馬来田のことを、万葉集などにみられる一音一字の万葉仮名では「宇麻具多」とも表記していますので、漢字二文字の好字「望陀」に変化するまでには、四文字表記も三文字の表記も混在していた時代があり奈良時代の直前頃からの律令制度による古代国家の体制が整えられていった時に、山・川などの名称や国・郡・郷などの名称の二文字化が推奨されたのです。しかし不徹底であったので、時を経た平安時代に改めて必須の事項としたということがわかります。

◆馬来田と望陀の記憶

馬来田から望陀への名称の変化は地名にも調の布にも現れていました。そして馬来田と望陀それぞれの名称は、長い歴史をとおして、人名［馬来田皇女・大伴連馬来田＝望陀・望多とも表記されている］、村名［望陀郡馬来田村＝（明治二二年の町村制施行時～昭和三〇年）］、校名［馬来田小学校（昭和二二年～平成三一年）・馬来田中学校（昭和二二年～昭和四六年）・望陀農学校（明治四四年～昭和三〇年）］、木更津東高校の校歌・君津市民歌の一節などとしても採用されて、一三〇〇年の時を超え、この地に生きた人々の消えない記憶とともに、今に受け継がれているのです。（つづく）

望陀郡衙推定地周辺と袖ヶ浦市飯富字馬来田の位置
（googleマップに加筆して作成）

薬師堂並びに坐禅堂建設計画

前回は内装工事の段階までをお伝えしましたが、その後内装工事が完了し、電気工事や左官工事へと移りました。薬師堂、坐禅堂それぞれに照明器具が設置され、外側には純白の漆喰が塗られました。また、正面には大きな木製の扉が取付けられました。

続いて回廊作りと欄干の設置です。御堂のまわりに石板が張られ、木製の欄干が据えられると、より一層趣が増しました。

現在は正面入り口の階段を作製中で、もう間もなく完成となります。

令和二年 年回表

一周忌	令和元年	十三回忌	平成二十年
三回忌	平成三年	十七回忌	平成十六年
七回忌	平成十六年	二十三回忌	平成十年
十三回忌	平成二十年	二十七回忌	平成六年
十七回忌	平成十六年	三十三回忌	昭和六十三年
二十三回忌	平成十年	三十七回忌	昭和五十九年
二十七回忌	平成六年	五十回忌	昭和四十六年
三十三回忌	昭和六十三年	百回忌	大正十年
三十七回忌	昭和五十九年		
五十回忌	昭和四十六年		
百回忌	大正十年		

行事予定

５月中旬時点では新型コロナウイルスの感染拡大が沈静の方向にむかっております。真光寺では皆さまの健康を第一に考え、３月から順次恒例行事の開催を中止してまいりましたが、今年後半の行事は、例年通りの日程を組んでおります。実施にあたっては慎重に状況を判断し、開催の可否を決定いたします。ご参加ご希望の場合はご確認の上、お申し込みください。中止の可能性についても予めご了承いただければと存じます。
７月、８月の施食法要(お盆法要)につきましては、同封のチラシをご参照ください。

行事		日時
施食法要	山門大施食（檀信徒）	8月 9日（日） 14時より
	縁の会施食法要	7月 7日（火） 13時より
		8月11日（火） 午前の部11時より 午後の部13時半より
秋彼岸法要	秋彼岸法要（檀信徒）	9月22日（火） 14時より
	縁の会秋彼岸法要	9月22日（火） 11時より
定例行事	精進料理と聖典講読の会	7月21日（火） 9月29日（火） 10月27日（火） 11月24日（火）
		11時より 昼食付 3,000円
	戒名を考える会	9月14日（月） 12月11日（金） 11時より 昼食付 3,000円
	坐禅会	毎月第2、第4土曜日 15時より
	囲碁の会(入門基礎講座)	11月25日（水）～26日（木）1泊 3食 8,000円
	ご詠歌練習日	7月 7日・21日 8月 4日 9月 8日・22日
		10月13日・27日 11月24日 12月 8日(忘年会)
		5月～9月：19時半より 10月～4月：19時より
	仏像彫刻教室	毎月第1、第3水曜日 13時30分より 3,500円
	縁の会 七日法要	7月 7日（火）9月 7日（月）10月 7日（水）12月 7日（火）
		・各月とも11時より 授戒式、月例供養 終わって昼食 午後は坐禅写経など
	縁の会 総会	11月 3日（火・祝）11時より

法事について

故人のご供養のためにご家族が営むご法事については、従来通りお申し込みをお受けしております。お堂の換気、室内の減菌など、ご安心いただけるよう努めております。ご無理のない範囲でご検討ください。墓参は従来通り、いつでも自由にしていただけます。

■各種お申し込み・ご連絡先

真光寺 〒299-0201 千葉県袖ケ浦市川原井634
TEL.0438-75-7414（代表） TEL.0438-75-7365（縁の会事務局） FAX.0438-75-7630
e-mail ennokai@shinko-ji.jp（縁の会） satoyama@shinko-ji.jp（上総自然学校）